

看護系大学における初年次教育の授業展開と 学生の動機づけの実態

野 原 真 理	遠 藤 由美子	山 崎 智 代
山 口 絹 世	田 中 厚 子	若 林 千津子
三 浦 幸	日向野 香 織	浦 山 修

Effects of the lesson method used in the first year education
on student motivation in a nursing university

Mari Nohara, Yumiko Endo, Chiyo Yamazaki, Kinuyo Yamaguchi,
Chizuko Wakabayashi, Sachi Miura, Kaori Higano, Osamu Urayama

Reprinted from

Medical and Health Science Research, Volume 5, pp. 141–157

March 2014

看護系大学における初年次教育の授業展開と学生の動機づけの実態

野原真理¹，遠藤由美子¹，山崎智代¹，山口絹世¹，田中厚子¹
若林千津子¹，三浦 幸¹，日向野香織¹，浦山 修²

¹つくば国際大学医療保健学部看護学科

²つくば国際大学医療保健学部診療放射線学科

【要 旨】本研究の目的は、看護大学における初年次教育の授業方法と学生の学習への動機づけの実態を明らかにすることである。本科目は1年次前期に開講し、レポートの作成方法、文献検索、数的処理、文章読解、討議法について、オムニバスの講義と演習で進められている。研究方法として、まず2011年～2013年度の授業の改善点を明らかにした。そして2013年度本科目を受講した大学1年生37名が授業終了後に提出した「この授業で学んだこと」のレポートについて、記述されたデータをコード化し、單元ごとに内容分析を行った。その結果、各單元に共通して【学んだこと】と【課題】の2つがカテゴリーとして集約された。開始時には「レポートの書き方を学びたい」と記述した学生が多かったが、終了後には、複数の單元に対する学びと自己の課題を記述していることがわかった。今後の課題として本科目で動機づけされた内容に対して継続した学習支援の必要性が示唆された。（医療保健学研究 第5号：141-157頁／2014年1月25日採択）

キーワード：大学教育，初年次教育，看護大学，学習動機，授業方法

序 論

2000年以降、少子化の影響を受けて大学全入時代を迎えたが、大学における看護教育は学問としての「看護学」を教授することと、実学としての「看護学」を教授するという両側面を担っていることが特徴である。毎年の入学生は「看護職」としての自己の将来像や、「看護師に

なる」という目的意識をもつ者が多い印象を受ける。しかし一方で、同世代の半数以上が大学に進学する通過儀礼の中では、入学動機がはっきりしないまま大学生となり、その結果として学力・学習目的・学習動機・学習習慣の多様な学生が入学してきていることも否めない。

このような背景のもとに、中央教育審議会（以下中教審）は「学士課程教育の構築に向けて」（中央教育審議会答申，2008）において、初年次教育の必要性を提言した。そしてその位置づけを「高等学校や他大学からの円滑な移行を図り、学習および人格的な成長に向け、大学での学問的・社会的な諸経験を成功させるべく、主に新入生を対象に総合的に作られた教育プログラム」あるいは、「初年次学生が大学生になることを支

連絡責任者：野原真理
〒300-0051 茨城県土浦市真鍋6-8-33
つくば国際大学医療保健学部看護学科
TEL：029-826-6622（代表）
FAX：029-826-6776
Email: m-nohara@tius.ac.jp

援するプログラム」とした。

看護系大学の初年次教育の実態として、豊嶋ら(2009)の調査によると授業形式としては、ゼミナール型が69.6%と多く、スキル・方法論型の10.9%、基礎・概論型8.7%、情報リテラシー型6.5%とは大きく差を開けている。また教員が重要視していることは5段階評定の平均値で、「学習スキル」が4.28点、「情報支援活用スキル」が3.76点、「スチューデント・ソーシャルスキル」が3.65点、「教科補習」が3.33点の順であった。

授業内容としては、「大学と高校の学習の違い」「ノートのとおり方」「テキストの読み方」「レポートの書き方」など複数単元で構成しているところが多い(澤田他, 2010; 石井他, 2012)。ユニークな例として、杉田ら(2011)は学生自身の生活習慣や生活体験が日常生活を支援する看護職に適したライフスタイルであるかどうかを重要視している。授業内容に健康生活、食生活、禁煙等の健康管理に関わる基礎情報を取り入れ、初年次教育前後を比較したところ運動習慣に向上があったと報告している。

A大学看護学科は前述の中教審の答申を受けて、2009年度カリキュラム改正時に入学年度となった3回生から、1年次前期においてアカデミック・スキルの修得に重点をおいた「医療保健学セミナー」(以下「医保セミナー」と表記する)を新たに開講した。内容は、レポートの作成方法、文献検索演習、数的処理、文章読解、討議法である。それとほぼ並行して、国語と数学に関しては正課外で補習するリメディアル教育も実施してきた。藤田(2002)は「初年次教育とリメディアル教育では、共に大学で対処しなければ、大学生としての本来の学びが成立しない点で共通しているが、初年次教育の内容はリメディアル教育と比較して、学生自身が不十分さや不適応さを自覚することが困難であるという点に違いがある」と述べている。

そこで本研究では、筆者らが2011年に前任者から引き継ぎ2013年まで担当した「医保セミナー」の授業展開を振り返り、学生が授業終了後に記述した学びの記録をもとに、大学での学習

への動機づけの実態を明らかにすることを目的とした。

目的

「医保セミナー」の授業展開と、学生の学習意欲の実態について明らかにし、今後の方向性について考察する。

方法

対象

「医保セミナー」を履修したA大学看護学科1年生82名のうち、研究協力に同意が得られ、かつ記録を提出した37名を対象とした。学生のレディネスとして、本科目は4月入学直後に始まる科目であり、第5回と6回の間に、患者との会話を含む病院での一日実習を行っている。

また、授業全体の評価として大学のFDとして取り組んでいる授業評価アンケート(82名)の結果も用いた。

研究期間

研究期間は、2013年4月～12月である。

方法および分析方法

初めに、2011～2013年度の「医保セミナー」の授業展開と前年度からの改善点について根拠を示して記述した。次に2013年度履修学生の記録を分析した。

分析方法として、1つ目に学生が「医保セミナー」第1回のガイダンス時に書いた「学ばたいこと」と第15回のまとめの時間に書いた「学んだこと」の自由記述について、どの単元の記述か単元毎に集計して比較した。2つ目に後者の記述について、南風原(2007)の手法を用いて単元ごとに内容を分析した。まず研究者が記述

内容の文脈を読み取った上で、学びの文を作成した。記述の中に2つ以上の学びがある場合には、生データを区切って1文中に1つの学びになるようにし、この1文を「学生の学びの記述」とした。次に、その内容の視点から、類似性に基づいて分類、整理を繰り返し、サブカテゴリー、カテゴリーとすすめた。そして単元の学習目標と照らし合わせて考察した。

分析の信頼性を確保するため、研究者3名で議論し合意のもとで分類を決定していった。さらに共同研究者全員に確認をとる手続きをとった。

倫理的配慮

学生には、授業が終了し成績評価後に、研究の趣旨、プライバシーの保護と匿名性の確保、研究協力の中断の保証、データの管理方法、研究の協力の有無が成績には関係しないことを口頭で説明し、同様の文書と同意書を配布した。その後同意書の提出と授業時に記述した記録の提出を得た。なお、本研究は、つくば国際大学倫理審査委員会の規程に則って実施した。

A 大学における初年次教育の概要

「医保セミナー」は、看護学科1年生(定員80名)を対象とし前期に開講する1単位30時間の専門基礎科目(必修)である。授業の目的(2011～2013年度共通)は「人々の健康支援を行う看護に必要な基礎的知識を習得する」で、主に看護学科教員が担当した。教員配置は、学生問題研究会編(2006)による討議の効果的な人数に基づき、学生10名に教員1名とした。そして討議法の演習担当教員がグループ全員のレポート指導も行っている。

全体は大きく5つの単元(レポートの作成方法、文献検索演習、数的処理、文章読解、討議法)から構成され、大学での学習に必要なスキルや態度を学ぶ内容とした。講義は3名の教員が分担し、その後に単元に応じた複数教員による

演習を行う形で2コマずつ進めている。数的処理では講義・演習に診療放射線学科の教員の、文献検索演習では図書館司書の協力を得た。詳細は表1に示したとおりである。テキストは、①看護学生のためのレポートの書き方教室(江原, 2008)、②討議の手引き(学生問題研究会編, 2006)、③KAN-TAN 看護の計算・数式(野崎ほか, 2009)である。

2011～2013年度の授業経過について

毎年授業終了後には、担当教員全員の参加による授業評価会議を実施した。そして学生の成績評価とともに授業の振り返りを行い、反省点を次年度に改善していくようにした。

結 果

以下に各年度の授業計画と改善点について記述する。

2011年度の授業計画

2009～2010年度までの2年間実施されてきた前述の5単元を基本的には継続し、個人レポートの課題は2題とし、1題は「高校生と大学生」とし大学生となった自分を意識することを意図した。もう1題は「医療保健学セミナーで学んだことおよび今後の自己の課題」とした。文章読解の課題は、看護学生論文2題と心に残る医療に投稿された論文2題であった。討議法は、発表を行わずに討議法そのものの方法を理解し、実施できることを到達目標とした。討議法のテーマは、①外国人看護師、②「患者様」という呼び方の是非、③命について、④私の宝物、の4題を提示し、グループでテーマを選ぶこととした(表1, 2)。看護職を目指す大学生として看護を取り巻く社会情勢に目を向けてもらうことを意図とした。

評価方法は、出席・および演習の参加態度が

表1. 医療保健学セミナーの授業計画（2011～2013年度）

授業回数	授業内容		
	2011年度	2012年度	2013年度
1	ガイダンス	ガイダンス	ガイダンス
2	文献検索演習	文献検索演習	レポートの書き方①
3	数的処理①(講義)	レポートの書き方①	レポートの書き方②
4	数的処理②(講義)	レポートの書き方②	レポートの書き方③
5	レポートの書き方①	レポートの書き方③	レポートの書き方④
6	レポートの書き方②	レポートの書き方④	文献検索演習
7	レポートの書き方③	数的処理①(講義)	数的処理①(演習)
8	レポートの書き方④	数的処理②(演習)	数的処理②(演習)
9	文章読解①	数的処理③(講義)	数的処理③(講義)
10	文章読解②(演習)	文章読解①	文章読解①
11	討議法①	文章読解②(演習)	文章読解②(演習)
12	討議法②(演習)	討議法①	討議法①
13	討議法③(演習)	討議法②(演習)	討議法②(演習)
14	討議法④(演習)	討議法③(演習)	討議法③(演習)
15	まとめ	まとめ	まとめ

表2. 授業方法と課題（2011～2013年度）

単元	課題とすすめ方		
	2011年度	2012年度	2013年度
レポート課題	『高校生と大学生』	『現代若者の特徴と職業選択』	『医療職とコミュニケーション』
文献検索演習	文献検索の方法(司書) ①図書館探検 ②文献検索	文献検索の方法(司書) 各自のキーワードで検索する	各自のキーワード、グループの サブテーマからの文献検索を行う
文章読解課題	看護学生論文2編 心に残る医療:2編	看護学生論文2編 心に残る医療:2編	看護学生論文2編 心に残る医療:2編
数的処理	一斉授業(演習) ①単位概念、割合・濃度・ 流量等の計算方法 ②グラフや表の読み方の基礎	一斉授業(看護と数的処理) ①単位概念、割合・濃度・ 流量等の計算方法 習熟度別演習	一斉授業(看護と数的処理) ①単位概念、割合・濃度・ 流量等の計算方法 習熟度別演習
討議法テーマ	①外国人看護師(EPA) ②「患者様」という呼び方の是非 ③命について ④私の宝物	『東日本大震災について』	『医療職とコミュニケーション』

注1) 2011年度討議法テーマは、グループで①～④から1つ選ぶ

注2) 2012、2013年度討議法のサブテーマはグループで討議して決める

20%、個人の課題レポートの1題目を30%、2題目を最終レポートとして50%とし、それぞれ評価項目を作成し点数化して評価した。

2011～2012年度への改善点および2012年度の授業計画

個人レポートの課題は「現代若者の特徴と職業選択」とした。看護職を選んだ自分をも見つめ直すことや現代の社会問題を考えることを意図した。進度として、この単元が始まる前に他の教科のレポート提出が先行することがわかり時期を早めることとした。討議法のテーマはこの年に起きた「東日本大震災について」とし、サブテーマをグループで討議し切り口を決めることとした。2011年度数的処理の内容は、①医療・保健に必要な単位概念、割合・濃度・流量等の計算方法の基礎を理解する、②医療・保健に必要なグラフの読み方の基礎を理解する、であったが、2012年度②は専門科目に委ねて内容から外した。そして①について学生間の学力の差が大きく、一律の授業では困難であることがわかり、コマ数を増やして習熟度別に丁寧に演習をしていくこととした。数的処理で増えた1コマは、討議法を減らして対応することとした(表1, 2)。

評価方法は、出席・および演習の参加態度40%、個人の課題レポート60%として評価項目を作成し点数化して評価した。2012年度からは「医療保健学セミナーで学んだことおよび今後の自己の課題」のレポートは評価には用いず、学生には自己の振り返りとしてまとめの時間に記述してもらうことに止めた。その理由として1題目のレポート指導が授業期間中にタイムリーにできないことがある。つまり学生が2題目に取り組む前に担当教員が1題目の指導を完了することが時間的に困難で、学生からは2題目も1題目と同様のレポートが提出されたことにある。

2012～2013年度への改善点および2013年度の授業計画

文献検索の中で、図書ガイダンスの部分は入学時ガイダンスに移行し、本単元の文献検索はレポートや討議法のテーマに関連する内容で行うように設定した。個人レポート課題と討議法のテーマを「医療職とコミュニケーション」と同一とし、学習を積み重ね連続性をもたせるものとした。医療職になることを選んだ自分も含めてコミュニケーションについて考えることを意図した。討議法において学生間でサブテーマの選定に困っているときには、教員の助言として、共感、ケア、患者、看護師、不全感の5用語をキーワードとして提示することとした(表1, 2)。

評価方法は、出席・および演習の参加態度40%、個人の課題レポート50%、数的処理試験10%として評価項目を作成し点数化して評価した。

2013年度の授業の実施内容について(表1, 2)

第1回目のガイダンスでは、シラバスに沿って科目の目的と各単元を学ぶ意義、授業のすすめ方の概要について説明した。加えて大学生活の中での図書館の効果的な利用法についても説明し、大学生の学習には事前学習、特に調べ学習が必須であることを強調した。そして学生にはガイダンス直後に「開始時の学びたいこと」を自由記述してもらった。

第2～5回のレポートの書き方の学習目標は、①大学教育におけるレポートの意義と種類、目的に応じたレポートの書き方やきまりを理解する、②看護学生として必要なレポートの作成の手順を理解する(流れ、テーマ設定、提出時の注意など)、③文章を書く上でのきまりや留意点について理解する、④文献・資料の集め方と整理の方法、活用方法と引用文献の書き方を理解する、の5点である。またレポートの要件として①「問い」が立てられている、②「問い」に対し

て「答え」が示されている、③客観的な事実(資料・データ)に基づき論証されている、④一定の構成形式に従って書かれている、⑤表現は明確にわかりやすく、シンプルである、を強調した。第3回目には個人レポート課題を提示し、第6回の文献検索演習では、各自がレポート作成に向けて図書館の蔵書およびweb上でテーマに関連し学習に必要な文献検索を行った。個人レポートの提出は、5月の連休を挟んで第7回目の授業日とした。

第7～9回の数的処理では、看護場面における数的処理能力の必要性について理解する、看護医療・保健に必要な単位概念、割合・濃度・流量等の計算方法の基礎を理解する、を学習目標として、講義と習熟度別の3クラスでの演習を実施した。

第10～11回文章読解では、①文章読解の意義と実際を理解する、②文章を読み概要や内容を読み取ることができる、を学習目標として、演習では要約し見出しをつける、意見交換する、数人が発表する、教員の解答例を提示するという手順で実施した。

第12～14回の討議法では、①討議の意義・種類・方法、看護実践の場で必要なカンファレンスやグループワークの方法について理解する、②テーマに沿った討議を通してクリティカルシンキングの必要性を理解する、③討議を進める上で必要な役割と責任について理解し実践する、を学習目標として、テーマに沿って各グループの担当教員が助言・指導を行った。討議のすすめ方は、①課題の設定、②問題点の抽出、③情報(知識・経験)、意見の提出、④意見の展開と統合、⑤討議のまとめである。第14回には、自分達の討議の振り返りの時間をとり教員が助言した。

最後の第15回では、授業全体の振り返りを行うことを目標に、数的処理の確認テストを行い、その後各自が本授業で学んだことや課題についてまとめ自由記述することを課した。確認テストでは、対比計算、溶液希釈等の計算において各クラス共に正答率が上がった。

各自の課題レポートについては、15回の授業終了後、夏休み前の決められた期間に担当教員が学生一人一人に対して指導を行い、同時に全体の評価について伝えた。

2013年度の「医保セミナー」のFDアンケートについて

学生の取組みの評価として「積極的に授業に参加していたか」は5段階評定の平均値は4.57点、「授業内容は理解できたか」は4.22点、「総合的に見て、この授業に満足したか」は4.00点だった。また教員の授業展開の評価として「授業の始めに科目の主題や到達目標が提示されていたか」は4.37点、「毎回の授業構成は、順序立てて整理されていたか」は4.26点、「授業の工夫(プリント、視聴覚教材、板書)は適切だったか」は4.30点、「教科書や参考書は役に立ったか」は4.32点、授業は学生の理解度を把握しながら進めていたか」は3.84点だった。

学生の学びたい単元と授業終了後の学んだ単元の記述について

「医保セミナー」第1回のガイダンス時に書いた「学びたいこと」では、レポートの作成方法が37名中37名、文献検索演習が0名、数的処理が5名、文章読解が2名、討議法が13名であった。第15回のまとめの時間に書いた「学んだこと」では、レポートの作成方法が37名中37名、文献検索演習0名、数的処理が20名、文章読解が7名、討議法が33名であった。

学生の学び

1) レポートの作成方法からの学び

終了レポートの中から61の記述を抽出し、分析対象とした。意味の類似性により、10のサブカテゴリーに分類し、2つのカテゴリーに類型した。学生の学びの記述を「」、サブカテゴリーをく、カテゴリーを【】と表記する(以下の項目

表3. レポートの書き方からの学生の学び

カテゴリ	サブカテゴリ	コード
学んだこと	意義の理解	万人に伝わるレポートをつくる 調べたことを引用して自分の考えを述べる 意義がわかった
	準備の必要性	レポートの目的と種類がわかった 自分で調べ理解することが重要である 調べ学習が必要である 文献をしっかり読みとらえることが必要である 医療従事者の著書や論文を知り、参考にできた 自分の考えだけではなく文献や資料を引用することが必要だと知った 作文ではないことが分かった 感想文ではないことがわかった
	作成手順の理解	「はじめに」「本論」「おわりに」を書くことを知った レポートの基本がわかった 序論・本論・結論は矛盾しないようにすること 書式がわかった 手順を学ぶことができた 引用の仕方がわかった 提出期日を守って初めて意味があることを知った
	文章を書く上でのきまりを知る	「である」調で書く 余白や文字の大きさの設定、文体の種類があることが分かった 専門用語や略語を使わないようにする 引用したら文末に文献を書かなければならない 文献の書き方を知った 専門用語や略語を使わないようにする 「なので」は使わない あいまいな比喻は使わない 言葉の使い方がわかった
	成果の認識	授業で学んだことを生かしてレポート作成ができた 必要なスキルを学べてよかった 講義によって自分の意見をまとめて書けるようになった レポートを書くことで自分の意見が発展する
	困難性の認識	自分の言葉で述べるのが難しい ルールを守って書くことに苦戦した 時間がかかった
	力不足の気づき	調べ学習が不足していたことが原因で内容が薄かった 文献を調べるのが少なく内容が薄いレポートだった まとまりがない感想文になってしまった 誤字脱字が多かった 引用部分が多くなった 下調べに頼りすぎて、自分の意見が書けなかった 知識、調べ学習が浅く内容が薄かった
課題	復習の必要性	復習したい 確認していきたい テキストを今後も参考にしたい
	習熟への思い	種類や作成手順を身につけたい 自分の言葉で述べられるようにしたい 1冊の文献だけだったので複数にしたい グラフや表を加えたい 明確で正確でわかりやすいレポートを心がけたい 「はじめに」「本論」「おわりに」のあるまとまったレポートを書けるようにしたい 要点をおさえ読みやすいレポート作成を今後の課題にしたい
	日頃からの心がけ	これから上達させていきたい たくさんの本をよみ自分の考える幅を広げていきたい

も同様とする）。抽出された内容を表3に示す。抽出されたカテゴリーは、【学んだこと】【課題】であった。

(1) 学んだこと

【学んだこと】は、〈意義の理解〉〈準備の必要性〉〈作成手順の理解〉〈文章を書く上での決まりを知る〉〈成果の認識〉〈困難性の認識〉〈力不足の気づき〉の8つのサブカテゴリーであった。

〈意義の理解〉では、「万人に伝わるレポートをつくる」「調べたことを引用して自分の考えを述べる」「意義がわかった」が記述された。

〈準備の必要性〉では、「自分で調べ理解することが重要である」「調べ学習が必要である」「自分の考えだけではなく文献や資料を引用することが必要だと知った」という記述がみられた。

〈作成手順の理解〉では、『はじめに』『本論』『おわりに』を書くことを知った」「序論・本論・結論は矛盾しないようにすること」「引用の仕方がわかった」「提出期日を守って初めて意味があることを知った」が挙げられた。

〈文章を書く上での決まりを知る〉では、『である』調で書く」「余白や文字の大きさの設定、文体の種類があることが分かった」「文献の書き方を知った」があった。

〈成果の認識〉では、「授業で学んだことを生かしてレポート作成ができた」「必要なスキルを学べてよかった」「レポートを書くことで自分の意見が発展する」という記述がみられた。

〈困難性の認識〉では、「自分の言葉で述べるのが難しい」「ルールを守って書くことに苦戦した」「時間がかかった」という記述がみられた。

〈力不足の気づき〉では、「調べ学習が不足していたことが原因で内容が薄かった」「まとまりがない感想文になってしまった」「下調べに頼りすぎて、自分の意見が書けなかった」という記述がみられた。

(2) 課題

【課題】は、〈復習の必要性〉〈習熟への思い〉

〈日頃からの心がけ〉の3つのサブカテゴリーで構成された。

〈復習の必要性〉では、「復習したい」「確認していきたい」「テキストを今後も参考にしたい」が抽出された。

〈習熟への思い〉では、「種類や作成手順を身につけたい」「自分の言葉で述べられるようにしたい」「明確で正確でわかりやすいレポートを心がけたい」「要点をおさえ読みやすいレポート作成を今後の課題にしたい」という記述がみられた。

〈日頃からの心がけ〉では、「これから上達させていきたい」「たくさんの本をよみ自分の考える幅を広げていきたい」が挙げられた。

2) 討議法からの学び

終了レポートの中から58の記述を抽出し、分析対象とした。意味の類似性により、12のサブカテゴリーに分類し、2つのカテゴリーに類型した(表4)。抽出されたカテゴリーは、【学んだこと】【課題】であった。

(1) 学んだこと

【学んだこと】は、〈準備の必要性の理解〉〈自己のコミュニケーション不足の傾向を知る〉〈伝えることの困難さ〉〈発言することの重要性〉〈話を聞くことの重要性〉〈メンバーシップの重要性を知る〉〈役割の理解〉〈成果の認識〉〈力不足の気づき〉の9つのサブカテゴリーから構成された。

〈準備の必要性の理解〉では、「レポートを忘れ発言できなかったので討議に参加できなかった」「調べたことを引用して自分の考えを述べる」「下調べが足りなかった」が記述された。

〈自己のコミュニケーション不足の傾向を知る〉では、「コミュニケーションの能力が低いことに気づいた」「相手の意見を理解して、自分の意見をわかりやすく伝えることが不足していた」「自分の意見を言うことが苦手だ」という記述がみられた。

〈伝えることの困難さ〉では、「相手にわかりやすく伝えることは難しいということがわかつ

表4. 討議法からの学生の学び

カテゴリー	サブカテゴリー	コード
学んだこと	準備の必要性の理解	レポートを忘れ発言できなかったので討議に参加できなかった 資料がないと討議は成り立たない 下調べが足りなかった
	自己のコミュニケーション不足の傾向を知る	コミュニケーションの能力が低いことに気づいた 相手の意見を理解して、自分の意見をわかりやすく伝えることが不足していた 自分の意見を言うことが苦手だ
	伝えることの困難さ	相手にわかりやすく伝えることは難しいということがわかった。 言いたいことはあるのに自分の言葉にするのが難しい 思っていることを言えなかった 相手にわかる発言ではなかった 自分の意見を言いたくても言葉が見つからない 自分の意見を伝えることの難しさを知った 意見はあるがまとめて発言することができなかった
	発言することの重要性	自分が発言することの大切さを知った どのように意見を述べるかがわかった 情報や知識、経験を踏まえて話すことが重要だ 積極的に発言することを心がけてできた
	話を聞くことの重要性	他の人の意見を聞き考えが深まった 相手の発言を聞く大切さを知った 他者の意見を聞くことができて勉強になった 他者の意見に新たな発見があった 他者の意見を踏まえて相違点を明らかにすることが重要だ 良い聞き手になることも必要であると感じた
	メンバーシップの重要性を知る	みんなが協力しよい討議ができた 個々の意見をまとめることで自分の意見も変化した 大人数で話すことで新しい発見があった 新たな考えを得ることができた
	役割の理解	司会役をして進行の大切さを学んだ 司会進行の難しさを知った 進行方法がわかった 書記に集中し、相手の表情を見ていなかった
	成果の認識	有意義だった 少し自信がついた 積極的に参加できた 積極的に発言できた 既存の考えを深めることができた 新たな考えを得ることができた 相手の発言をしっかり聞くことができた 話し合いにより深まった コミュニケーションの練習にもなる
	力不足の気づき	積極性に欠けた 消極的だった あまり発言できなかった 積極的に発言できなかった
課題	討議への参加から得た課題	言いたいことを整理し発言できることを課題とする 発言していくことが今後の課題だ 相手の考えを理解する力が必要だ 根拠のある発言で説得力があるようにすることが課題だ 復習し上達したい
	日常生活をとおしての課題	話していない人と積極的に話していきたい たくさんの考え方ができるように様々な知識を身に付け活かしていきたい 友人・家族とたくさん話し自ら発言する努力をしたい
	他の教科への発展	他の講義でも思考すること主張することを意識していきたい

た」「思っていることを言えなかった」「自分の意見を言いたくても言葉が見つからない」「言いたいことはあるのに自分の言葉にするのが難しい」が挙げた。

〈発言することの重要性〉では、「自分が発言することの大切さを知った」「情報や知識、経験を踏まえて話すことが重要だ」「積極的に発言することを心がけてできた」があった。

〈話を聞くことの重要性〉では、「他の人の意見を聞き考えが深まった」「他者の意見に新たな発見があった」「他者の意見を踏まえて相違点を明らかにすることが重要だ」「良い聞き手になることも必要であると感じた」という記述がみられた。

〈メンバーシップの重要性を知る〉では、「みんなが協力しよい討議ができた」「個々の意見をまとめることで自分の意見も変化した」「大人数で話すことで新しい発見があった」という記述がみられた。

〈役割の理解〉では、「司会役をして進行の大切さを学んだ」「司会進行の難しさを知った」「進行方法がわかった」という記述がみられた。

〈成果の認識〉では、「有意義だった」「積極的に参加できた」「少し自信がついた」「話し合いにより深まった」が挙げた。

〈力不足の気づき〉では、「消極的だった」「あまり発言できなかった。」「積極性に欠けた」という記述がみられた。

(2) 課題

【課題】は、〈討議への参加から得た課題〉〈日常生活をとおしての課題〉〈他の教科への発展〉の3つのサブカテゴリーから構成された。

〈討議への参加から得た課題〉では、「言いたいことを整理し発言できることを課題とする」「相手の考えを理解する力が必要だ」「根拠のある発言で説得力があるようにすることが課題だ」が記述されていた。

〈日常生活をとおしての課題〉では、「話していない人と積極的に話していきたい」「たくさん考え方ができるように様々な知識を身に付け活かしていきたい」「友人・家族とたくさん話し自ら発言する努力をしたい」という記述がみられた。

〈他の教科への発展〉では、「他の講義でも思考すること主張することを意識していきたい」が挙げた。

3) 文章読解からの学び

終了レポートの中から15の記述を抽出し、分析対象とした。意味の類似性により、4つのサブカテゴリーに分類し、2つのカテゴリーに類型した(表5)。抽出されたカテゴリーは、【学んだこと】【課題】であった。

(1) 学んだこと

【学んだこと】は、〈視点の理解〉〈成果の認識〉〈困難性の認識〉の3つのサブカテゴリーから構成された。

表5. 文章読解からの学生の学び

カテゴリー	サブカテゴリー	コード
学んだこと	視点の理解	どのように読解していくのがわかった 要点をマーカーすることでわかりやすくまとめられた
	成果の認識	何回か要約するうちにできるようになった 他者の要約を参考にしできるようになった わかりやすくできるようになった まとめることの重要性を知った 要約する力がついた
	困難性の認識	内容を理解して自分の言葉で要約することが難しかった
	日頃からの心がけ	本を読みたいと思った 読書をしてできるようにしたい 本や新聞をたくさん読んでいきたい

〈視点の理解〉では、「どのように読解しているのかがわかった」「要点をマーカーすることによってわかりやすくまとめられた」が抽出された。

〈成果の認識〉では、「何回か要約するうちにできるようになった」「他者の要約を参考にしてできるようになった」「まとめることの重要性を知った」という記述がみられた。

〈困難性の認識〉では、「内容を理解して自分の言葉で要約することが難しかった」が記述されていた。

(2) 課題

【課題】は、〈日頃からの心がけ〉がサブカテゴリから構成された。

〈日頃からの心がけ〉では、「本を読みたいと思った」「本や新聞をたくさん読んでいきたい」「読書をしてできるようにしたい」が記述された。

4) 数的処理からの学び

終了レポートの中から36の記述を抽出し、分析対象とした。意味の類似性により、7のサブ

カテゴリに分類し、2つのカテゴリに類型した(表6)。抽出されたカテゴリは、【学んだこと】【課題】であった。

(1) 学んだこと

【学んだこと】は、〈準備状態の認識〉〈重大性の認識〉〈既習内容の確認〉〈成果の認識〉〈力不足の気づき〉の5つのサブカテゴリから構成された。

〈準備状態の認識〉では、「BMI、コレステロールの計算は初めて学んだ」「単位の知識がない」が記述された。

〈重大性の認識〉では、「間違えると患者の命にかかわるので正確さが大切」「看護師として必要なのは知識だ」「なぜ数的が必要なのか楽しく学べた(ナイチンゲール)」という記述がみられた。

〈既習内容の確認〉では、「高校までの応用だ」「基本的なことだったのでできた」「理解できていた」が挙げられた。

〈成果の認識〉では、「役に立った」「濃度問題が苦手だが、できるようになった」の記述がみ

表6. 数的処理からの学生の学び

カテゴリ	サブカテゴリ	コード
学んだこと	準備状態の認識	BMI、コレステロールの計算は初めて学んだ 単位の知識がない
	重大性の認識	間違えると患者の命にかかわるので正確さが大切 看護師として必要なのは知識だ 患者さんの命にかかわること なぜ数的が必要なのか楽しく学べた(ナイチンゲール) (数的処理の)大切さがわかった
	既習内容の確認	高校までの応用だ 基本的なことだったのでできた 理解できていた
	成果の認識	役に立った 濃度問題が苦手だが、できるようになった よくできた
	力不足の気づき	自分の勉強不足を感じた 計算式を覚えるのが難しい
課題	復習の必要性	看護には必要なことなので復習したい 滴下数や希釈など復習したい 自主的に復習したい 割合は苦手なので復習したい
	学びの大切さの実感	学んだことを看護師として生かしていきたい 学んだことを応用できるようにしたい 臨床の現場でも使えるようにしたい

られた。

〈力不足の気付き〉では、「自分の勉強不足を感じた」「計算式を覚えるのが難しい」という記述があった。

(2) 課題

【課題】は、〈復習の必要性〉〈学びの大切さの実感〉の2つがサブカテゴリーから構成された。

〈復習の必要性〉では、「看護には必要なことなので復習したい」「自主的に復習したい」「割合は苦手なので復習したい」が記述された。

〈学びの大切さの実感〉では、「学んだことを看護師として生かしていきたい」「学んだことを応用できるようにしたい」「臨床の現場でも使えるようにしたい」の記述がみられた。

考 察

「医保セミナー」の授業展開について

2011～2013年度の授業展開に関しては、毎年試行錯誤して変更してきた中に大きな改善点は2つあるといえよう。

1つ目は、数的処理が一律の授業では困難が生じたために、2012年度から習熟度別の演習を実施した点である。薬用量計算など看護職に必要な数的処理の知識は、少数や分数を含む四則演算や単位の換算であり、初年次教育ではその基礎的な知識の確認と学習の動機づけが重要となる。第15回の試験で各クラスとも正答率があったことは、習熟度に合わせた演習が学生にとって段階を踏んで学習することとなり、教員も学生の理解度に合わせた指導が可能となったことが考えられる。全体に対しての講義では、なぜ看護職に数的処理の知識が必要であるか、ナイチンゲールの業績を紹介した導入教育を行っており、看護職を目指す学生のこの単元を学習する意義の理解につながることが考えられた。

2つ目は、個人レポートの課題の提示に始まる看護専門教育への導入教育である。初年次教

育の基盤として、高校までの教えられる学習から、大学では自ら学びとる学習への転換が図られなければならない。本来はその課題を学生が自ら見つけてくることが求められるが、A大学におけるレポートの課題、文章読解の課題、あるいは討議のテーマは、教員による導入教育の意味をもつと考えられる。

2011年度の討議のテーマは、看護学生として目を向けてもらいたい事柄から身近なものまで4題のテーマを提示したが、8グループが「外国人看護師」で、2グループが「命について」を選択した。前者はEPA(経済連携協定)に基づく外国人看護師・介護福祉士受け入れ関係事業を中心とした調べ学習で終始してしまうグループが多くなり、後者は初学者には切り口や深さが難しいようであった。このことはテーマからサブテーマを決めていく過程や途中行き詰まった時の教員の助言の重要性が示唆している。2012年度は「東日本大震災」をテーマとしたが、討議が進まず教員の介入が求められた。実際に被災した学生もありそこへの配慮も必要となった。当初教員としては原発問題や風評被害等の問題も含み国全体が直面した出来事としてテーマに取り上げる意義は大きいと考えていたが、初学者の学生がグループ討議として取り組む問題としては、テーマが大きすぎて切り口を探すことが難しいことが考えられた。岡崎ら(2010)は、演習での教員の役割として「学生の主体性を刺激しながら待つ過程で教員は学生の戸惑いや緊張感を感じるが、粘り強く支援する必要がある」と述べている。入学後初めてのグループ学習で、お互いを知ることや自ら発言することは、学生達にとっても高いハードルの側面もあるだろう。その中でどの学生も同じ立ち位置で討議に参加できるテーマの選定が必要と考えた。

そこで2013年度は、「医療職とコミュニケーション」をテーマとした。学生は前述の一日病院実習での体験や、個人レポート課題で一度取り組んだテーマであったため、活発に討議が展開されたグループが多かった。石井ら(2012)は「初年次教育に問題解決型学習を取り入れてお

り、学生自ら発見した問題や与えられた問題に対して、解決するためにはどうしたらよいか実際に調べたり、有効と思われた方法を試したりしながら解決し、問題の解決方法や原理・原則を理解することができる」と報告している。そしてこの学習法では、プロセスの中で内発的な学習動機を高め、物事を多面的に捉えることが可能となり、主体的な学習態度を獲得できると述べている。A大学の討議法では、学生自ら「問い」を見つけて、クリティカルシンキングの必要性を理解することを学習目標としているが、教員の指導方法にも共通したスキルが必要と考えた。岡崎ら(2010)の研究でも同様の結果が述べられており、A大学においても課題と考えられる。

学生の授業評価について

FDの授業評価アンケート結果から見た学生の取り組みは、「積極的に授業に参加していたか」は5段階評定の平均値4.57点で、入学してすぐの開講の本授業に熱心に取り組んでいたと考えられる。さらに「授業内容は理解できたか」は4.22点、「総合的に見て、この授業に満足したか」は4.00点と高得点であった。初年次教育としては学習準備の内容が多いので当然の結果といえる。

また教員の授業展開として「授業の始めに科目の主題や到達目標が提示されていたか」が4.37点、「毎回の授業構成は、順序立てて整理されていたか」は4.26点、「授業の工夫(プリント、視聴覚教材、板書)は適切だったか」は4.30点と高い評価であった。オムニバスによる授業であったのでその影響もあると考えられる。しかしその中で、「授業は学生の理解度を把握しながら進めていたか」は3.84点で若干低かった。この点は学力の個人差の部分もあるかもしれない。さらに「教科書や参考書は役に立ったか」は4.32点で、今後学生が自主的に学習していく上で十分活用されることが期待できる。

学生の単元内容への動機づけについて

入学当初の授業では、学生の真剣なまなざしに教える側が圧倒されることも多い。しかし、徐々に真剣さは影をひそめ学習意欲が低下していく学生も散見する。その一つの要因として、意欲はあっても「どう学んだらよいかわからない」「授業資料や教科書が理解できない」結果、意欲が低下していく状況が考えられる。このような学生は、これまでの高校までの学習で「学び方」を習得していないことが推測される。文章の理解、文章にまとめる、情報収集の仕方、計算方法、自分で考えるなどの基本的な力が身につけていないのである。これらの基礎的学力を定着させなければ、医学や看護学の基礎知識を吸収できないばかりか、看護教育で目指す思考力、判断力、問題解決能力を身につけさせることは極めて困難である。

学生が授業前後に記述した「学びたいこと」「学んだこと」の単元毎に前後比較したところ、レポートの作成方法が前後とも37名中37名と最も多かった。討議法は授業前13名から授業後33名、同様に数的処理が5名から20名に、文章読解が2名から7名にと増加していた。この4単元については授業を受けて内容に興味を持ち、学習の必要性の認識が高まったことが考えられる。一方、文献検索演習に関しては、授業後においても学びの記述をした学生が0名と動機づけができていないことが考えられる。この単元は図書館司書との連携により進めているが、大学におけるアカデミックな学習において、文献検索は重要な位置づけにあることを強化して伝えいくことが課題と考えられる。

以下に、「医保セミナー」において、学生が「学んだこと」と「課題」の実態を学習目標と照合しつつ考察する。

1) レポートの作成方法からの学び

学生は、レポートの作成から〈意義の理解〉〈準備の必要性〉〈作成手順の理解〉〈文章を書く上での決まりを知る〉ことを学んでいる。これ

はレポートの書き方の学習目標である①大学教育におけるレポートの意義と種類、目的に応じたレポートの書き方やきまりを理解する、②看護学生として必要なレポートの作成の手順を理解する、③文章を書く上でのきまりや留意点について理解する、④文献・資料の集め方と整理の方法、活用方法と引用文献の書き方を理解する、の内容に相当する。〈成果の認識〉〈困難性の認識〉〈力不足の気づき〉は、作成過程においての自己評価にあたいする。

学生自身の課題として、〈復習の必要性〉〈習熟への思い〉〈日頃からの心がけ〉を挙げており、今後の学習の動機づけがされている。教員に提出されたレポートを学生一人ひとりにフィードバックしなから返却し、今後の課題を明確に伝えたことも影響していると考えられる。ただレポートを返却するだけでなく、肯定的評価も加え今後の課題を明確に伝えることで今後の動機づけに繋がる。山田(2009)はレポート作成力について、指導の改善度が高い技能系項目と述べており、授業や実習で作成し提出が求められるレポートにおいて、単に成績評価するだけでなく、形式内容等について継続的に指導していく必要性が示唆された。

2) 討議法からの学び

学生は討議法を通し、〈準備の必要性の理解〉〈自己のコミュニケーション不足の傾向を知る〉〈伝えることの困難さ〉〈発言することの重要性〉〈話を聞くことの重要性〉〈メンバーシップの重要性を知る〉〈役割の理解〉〈成果の認識〉〈力不足の気づき〉を学んでいる。

〈準備の必要性の理解〉では、「レポートを忘れた発言できなかったので討議に参加できなかった」「下調べが足りなかった」など、学生の受身的学習姿勢が表れ、討議法の学び以前の問題と思われる。〈自己のコミュニケーション不足の傾向を知る〉〈伝えることの困難さ〉〈発言することの重要性〉〈話を聞くことの重要性〉〈メンバーシップの重要性を知る〉〈役割の理解〉〈成果の認識〉は、討議法の学習目標の①討議の意

義・種類・方法、看護実践の場で必要なカンファレンスやグループワークの方法について理解する、③討議を進める上で必要な役割と責任について理解し実践する、に当てはまる。とくに、「自分が発言することの大切さを知った」「どのように意見を述べるかがわかった」「他の人の意見を聞き考えが深まった」「他者の意見に新たな発見があった」など〈発言することの重要性〉〈話を聞くことの重要性〉などの意見が多くあり、討議法の真髓を学んでいると言える。特に医療職としてコミュニケーションは重要であり、自分の傾向への気づきがあったことは重要なことだと考える。

学習目標の②「テーマに沿った討議を通してクリティカルシンキングの必要性を理解する」についての記述がなかった。これは、学生がクリティカルシンキングできるような教員のかかわり方が少なかったことが考えられる。今後、学生の思考の引き出し方の技法を身につけるなど教員の指導方法を向上させていかなければならない。

討議法の課題として、〈討議への参加から得た課題〉〈日常生活をとおしての課題〉〈他の教科への発展〉を挙げており、他科目への動機づけや日常生活での日々のトレーニングの必要性の自覚ができたと読み取れる。山田(2009)は、「批判的思考力」という論理的技能項目は短期的に伸びが期待できるという性質の技能ではなく大学4年間をとおして継続的に育成していくべき技能であると述べている。グループワークやカンファレンスで回数を経験しながら、教員も引き続き指導していく必要が確認された。

3) 文章読解からの学び

文章読解からの学びでは、15のコードを抽出しているが、他のカテゴリーと比較すると記述数が少ない。自由記述は学生が印象に残ったことが表現されるため、あまり心に残らなかったとも推測できる。またレポート作成や数的処理のように成果が客観的にみえにくいのも要因の一つであると考えられる。

文章読解では、〈視点の理解〉〈成果の認識〉〈困難性の認識〉を学んでいる。文章読解の学習目標の①文章読解の意義と実際を理解する、②文章を読み概要や内容を読み取ることができる、に当てはまる。課題としては〈日頃からの心がけ〉が挙げられており、すぐに身に付く能力ではないことを認識したことの裏返しではないか。それが「本を読みたいと思った」「本や新聞をたくさん読んでいきたい」「読書をしてできるようにしたい」という記述に表れていると言える。

文章読解力は、問題解決力や理解力のベースになるものであり、目に見えないが重要な能力である。このことをまず教員自身が再認識し、学生に継続的な指導を強化していくことが必須である。

4) 数的処理からの学び

数的処理で学んだことは、〈準備状態の認識〉〈重大性の認識〉〈既習内容の確認〉〈成果の認識〉〈力不足の気づき〉である。「BMI、コレステロールの計算は初めて学んだ」「単位の知識がない」「間違えると患者の命にかかわるので正確さが大切」「看護師として必要なのは知識だ」など記述されている。これは、学習目標の「看護場面における数的処理能力の必要性について理解する、看護医療・保健に必要な単位概念、割合・濃度・流量等の計算方法の基礎を理解する」に当てはまる。この単元は前述のとおり個人差がみられるが、演習をとおして「数学や数字の苦手意識」を「やればできる」に変えていくことが重要と考える。そのことが自己肯定感の向上につながり、学習の継続を支えることが推察される。

課題として、〈復習の必要性〉〈学びの大切さの実感〉が挙げられている。「看護には必要ことなので復習したい」「自主的に復習したい」「割合は苦手なので復習したい」「学んだことを看護師として生かしていきたい」「学んだことを応用できるようにしたい」など看護師としていかに大切な基礎的知識であるかが実感できたと言える。

対象となった「医保セミナー」履修者は82名であったが、記録の提出は37名(45.1%)に止った。今回成績評価後に一度返却していた記録について、授業のまとめのために再提出を求めた。そのため学生の自己選択バイアスの存在が考えられ、その点について本研究の限界とも言える。

まとめ

本研究では看護系大学における初年次教育の授業方法と学生の学習への動機づけの実態について以下のことが明らかになった。

1. 学生の「学びたいこと」と「学んだこと」の記述は、レポートの作成方法の37名が最も多かった。討議法は前者13名から後者33名に、数的処理が5名から20名に、文章読解が2名から7名に増加していた。このことから授業を受けてその単元の内容に興味を持ち、学習の必要性の認識が高まったことが考えられる。
2. 学生が「医保セミナー」を受講して「学んだこと」は、各単元に共通して【学んだこと】と【課題】の2つがカテゴリーとして集約され、大学での学習の動機づけが確認された。
3. 数的処理の習熟別演習が学習の動機づけを高めることが示唆された。
4. 「医保セミナー」におけるレポートの課題、文章読解の課題、討議のテーマは、看護専門教育につながるための導入の意味合いがあることが示唆された。
5. 今後の課題として、レポートの作成方法、討議法等の本科目で動機づけされた内容に対して継続した学習支援の必要性が示唆された。

謝 辞

本研究にご協力いただきました学生の皆様に深く感謝いたします。

参考文献

- 石井美紀代，鹿嶋聡子，布花原明子，前田由紀子，唐崎愛子，高橋甲枝，小野正子，石田佳奈子，鹿毛美香，浅野嘉延（2012）初年次教育における問題解決型学習の効果．西南女学院大学紀要．116:25-34.
- 江原勝幸（2008）看護学生のためのレポートの書き方教室．照林社，東京．
- 岡崎美智子，下條美和，濱寄真由美，シェリフ多田野亮子，安藤敬子，仲前美由紀，永井あけみ，平川静江，波止千恵，脇崎裕子，上田智之，井上都，小田正枝（2010）初年次教育における「基礎ゼミナールⅠ・Ⅱ」のあり方．国際医療福祉大学 福岡リハビリテーション学部・福岡看護学部紀要．6:49-55.
- 学生問題研究会編（2006）討議の手引き．民主教育協会，東京．
- 澤田忠幸，鳥居順子，草薙康城，加藤徳雄，木下誠一，鈴木光代（2010）愛知県立医療技術大学における初年次教育の取組みと課題．愛知県立医療技術大学紀要．7(1):29-35.
- 杉田豊子，城憲秀，牧野典子，堀井直子，山口直己，山田恵子，足立はるゑ（2011）看護大学生のライフスタイルと自己管理能力との関連—初年次教育前後の比較と課題—．生命健康科学研究所紀要．18:80-86.
- 豊嶋三枝子，小口多美子（2009）看護系大学における初年次教育の実態—教員への質問紙調査から—．看護教育．40:140-142.
- 野崎真奈美，田中美穂，蜂ヶ崎令子（2009）KAN-TAN 看護の計算・数式．医学書院，東京．
- 濱名篤（2007）Ⅰ年次教育の重要性とフレッシュマン・セミナー．IDE 現代の高等教育．429:5-13.
- 藤田哲也（2002）京都光華女子大学における導入教育：大学基礎講座．京都大学高等教育研究．8:101-147.
- 藤田哲也（2006）初年次教育の目的と実際．リメディアル教育研究．1:1-9.
- 南風原朝和，市川伸一，下山晴彦（2007）心理学研究．日本放送出版協会，東京．pp.44-57.
- 山田礼子（2009）初年次教育とは—「生徒」から「学生」にするための方策—．看護教育．50(5):365-381.

Report

Effects of the lesson method used in the first year education on student motivation in a nursing university

Mari Nohara¹, Yumiko Endo¹, Chiyo Yamazaki¹, Kinuyo Yamaguchi¹,
Chizuko Wakabayashi¹, Sachi Miura¹, Kaori Higano¹, Osamu Urayama²

¹Department of Nursing, ²Department of Radiological Technology,
Faculty of Health Science, Tsukuba International University

Abstract

The purpose of this research is to clarify the effects of the lesson with some motivation on the first year students in a nursing university. A subject was held in the first half of year 1, and it was started with lectures and exercises about creating reports, document retrieval, numerical processing, text reading comprehension, and debating methods. We summarized the lesson in 2011 and then gave the partially-improved lesson in 2012. This kind of improvement was carried out also in 2013. Thirty-seven freshmen who took a course on this subject at a university in 2013 presented the report on “topic studied in this lesson” at the end of the lesson. The data from this report were coded and the content was analyzed for every unit. Two items in common with each unit, [having learned] and a [subject], were collected as a category. Many students expressed “I would like to study how to write a report” at the beginning of the course, but they preferred learning two or more units and a self-chosen subject by the end of the course. Future support on course contents that promotes motivation in the subject will be needed. (Med Health Sci Res TIU 5: 141–157 / Accepted 25 Jan, 2014)

Key words: University education, First year education, Nursing university, Study motive, lesson method